

# 日中学生友好登山隊 六名が「雪宝頂」に登頂



BCより望んだ雪宝頂の全景



1999 年 (平成 11 年)  
11 月号 (No. 654)  
社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club  
定価 1 部 150 円

## 目次

日中学生友好登山隊 6 名が「雪宝頂」に登頂…………… 1  
 海外の山…………… 5  
 高所テントの歴史をたどる…………… 6  
 報告  
 自然保護委・全国集会開催…………… 9  
 データバンク研・インターネットの利用方法が多様化…………… 10  
 山の自然学研・上高地自然解説の 22 日…………… 11  
 さんけんだより…………… 10  
 東西南北  
 モンブラン情報 1999 年夏…………… 12  
 ウェストン祭今昔…………… 13  
 図書紹介…………… 14  
 『読み、歩き、書いた』『一期一会の山、人、本』『能海寛 チベットに消えた旅人』『山岳写真撮影テクニック』『鳥のてっぺんから鳥を見る』『山の生涯』  
 図書受入報告 新入会員…………… 16  
 台湾大地震関連募金…………… 16  
 会務報告…………… 17  
 関東一都六県の会員諸氏へ…………… 18  
 会員異動 ルーム日誌…………… 18  
 INFORMATION…………… 19

▶ 日本山岳会事務取扱時間  
 月・火・木…………… 10~20 時  
 水・金…………… 13~20 時  
 第 2、第 4 土曜日…………… 閉室  
 第 1、第 3、第 5 土曜日…………… 10~18 時

▶ 図書室開室時間  
 日曜・祭日・月曜日を除く毎日…………… 13~20 時

▶ ルーム年末年始休み…………… 12月29日~1月5日

日中学生友好登山隊 (日本側学生 10 名) は九月三日、成田を出発。十一、十二の両日、六名が雪宝頂 (五五八メートル) に登頂。貴重な経験を積んで二十二日無事帰国しました。彼らの日誌から、若々しい感性で臨んだ山登りをご報告します。

■ 北京、成都、BC へ

● 九月三日、成田十二時集合、海外旅行が初めてという者も数名いる。小倉副会長、各大学の先輩・後輩に見送られて機上へ。

北京空港には、今回の登山隊長であり、医師でもある李舒平氏らが出迎えてくださる。夕食の席では、本格的な中国料理は初めてのわれわれを、中国側登山隊長である王勇峰氏 (セブンスミッツ登頂者) が歓迎してくださいました。

● 九月四日、人民大会堂で中国スポーツ大臣と歓談後、副主席・李致新氏はじめ中国登山協会の方々との昼食を受ける。本登山隊の紅一点の波辺さんに興味津々といった感じであった。天安門広場、故宮博物館を見学。夕食の席には中国登山協会主席の曾曙生氏が入院中にも関わらず出席され、激励の言葉を述べられた。

● 九月五日、成都へ向かう。夕食の火鍋を囲みながら、中国側隊員と初めて顔を合わせた。自己紹介を絡めて少しずつ話をしていく。北京大学の一人に「のび太くん」に似た学生を見つけた。以後彼のニックネームになった。

● 九月六日、午前中は三国志で有名な「武侯祠」を見学。

夜、四川省登山協会主催の歓迎パーティーが開かれた。会場には「熱烈歓迎中日京資青年友好雪宝頂登山

隊」と書かれた赤地の幕が張り出されてきた。京セラの現地役員、四川省登山協会の副主席らから歓迎と激励の言葉をいただいた。宴の途中で日本側の隊長・宮崎紘一氏、鳥居和雄氏、松本達彦氏が到着し、日本側メンバーが全員そろった。

この夜から渡辺佳苗、岡本雄樹、松本信太郎、新津正浩がガイアモックスを一日二回常備薬として服用。

●九月七日、北京入りしてから今までお世話になった吉永英明氏と別れ、上下左右前後にゆれる道路を上納米

へ。十八時過ぎに到着し、早速軍隊テントを設営する。中心のポールが三メートル弱、縦横四メートルのサーカステントである。これが本登山隊の大本営で、一回目は手伝うどころか、啞然として立ち尽くすだけ。設営に手間がかかったが、何とか種類の違いを建てることができた。シユラフもその場で受け取った。このシユラフをはじめ、テント、中国側隊員が身につけている衣類まですべて「OZARK」という韓国製品であった。

夜の健康チェックは全員異常なし。

日中学生友好登山隊のメンバー (BCにて)



●九月八日、いよいよBCに入る日である。中国側装備は三十頭前後の馬に積まれて先発。四時間ほど登ると広い台地に出た。ここがBCである。まず大本営を建て、軍隊テントの小さなものを一つ、布製のサーカステントが二つ並び、その周りに「OZARK」のテントが広がるBCができあがった。

十八時三十分、馬が日本側の装備を荷揚げしてきた。二〇〇メー

トルのフィックスロープ四束を五〇メートルずつに分割する作業に一時間ほどかかってしまった。夕食の献立はふつから炊き上がったご飯と真空パックのザーサイ、肉の缶詰とインゲンの炒め物。二十二時就寝。

### ■登山活動

●九月九日、晴。ルート工作隊・中国側八名、日本側四名(松本信、松本達、都築、岡本)

中国側は七時出発。われわれは少し遅れて中国隊の後を追った。ルートはモレーンを右側から回り込み、コブ上のモレーン群をアップダウンしながら進み、ガレ場の斜面に取り付いた。一歩踏み出すたびに足場の石が流れて歩き辛い。流れた石が他の石を巻きこんで落石を招きそう、危険極まりない。岩が横長にせり出した四七〇メートル地点に十二時着。そこからフィックスを張る。松本達、都築は下山、松本信、岡本は四九〇メートルの稜線まで出てからBCに戻ることになった。

●九月十日、晴のち曇り。第一次アタック隊(松本信、平井、岡本、渡辺)CIへ。

晴れ渡った天気の中、CIに向けて日本側四人は七時五十分出発。十五分ほど行ったところで、若山の調子が悪く、BCに戻ることにする。

代替要員として急遽、渡辺がCI入り。平井、岡本は先行し、モレーンの手前で松本信と渡辺は合流する。

昨日のルートは距離が長く、斜面も落石の危険が多いので、モレーンを左から巻いて行くルートを登った。連日の晴天で、雪宝頂からたれている懸垂氷河が崩れ、ひっきりなしに豪快な爆音がとどろいていた。十四時、フィックスロープを張った地点に着く。だんだんと天候が悪化してくる。落石が多いので神経を使うが、すばやく四九〇メートルまで上がり、最後の登りは赤旗を頼りに気合で乗りきった。

五一〇メートルのCIでは少しでも多く水分を取るよう心がけた。ぎゅう詰めのテントだが、横になつたらすぐ寝入ってしまった。

宮崎氏、佐藤氏、体調の回復がはかばかしくない新津、石川は、BCより本日下山する。

●九月十一日、小雨のち曇り。六時三十分起床、八時出発の予定だったが、小雨が降って視界もなく、風も強い。中国側と相談し、しばらく待機。

十時十五分、大して天候も回復しないが、出発。歩きはじめた直後の岩場で、皆の気分はたちまち引き締まる。雪稜に出てからはただひたすら登る。五五〇メートルを過ぎた

あたりから各自のペースで登高し、十五時三十分、遂に一次隊全員が雪宝頂の頂に立った。

日中両国の隊員が互いに健闘を祝し、旗を出したり、カメラを構えたり、ビデオを回したりと忙しい。無線でB・Cに報告したら歓声が聞こえてきた。あとは慎重に下るだけ。

明日の登頂を目指して第二次アタック隊(松本達、都築、若山)はB・Cを十三時三十分に出発する。モレーンの左を回りこんで小さな沢を涉ったあたりで、体調の整わなかった若山がB・Cへ下る。十八時三十分、C・I到着。下山準備をすすめていた



頂点への稜線、あまり急ではなかった

第一次隊と固い握手を交わし、別れる。C・Iテントの夜はココア、甘酒、コーンスープと水気なら何でもと飲みまくった。

●九月十二日、曇り。

昨日と同じような天候だったので、第二次アタック隊の松本達、都築は七時の出発を八時三十分に変更。C・Iからフィックスされた岩稜帯を一回の懸垂下降を交えて通過し、雪稜手前に出る。中国隊員はここでプラスチックブーツに履き替え、アイゼンを装着した。ブーツとアイゼンがぴったり合っていない者もいて少し心配だ。雪稜はそれほど急ではない。雪質は少し固い雪の上をざらめがおおった感じだった。十二時三十分、全員が頂上に立つ。相変わらずガスがかかっていたが、写真を撮り、十四時二十分、C・Iに戻る。

この時点で第三次アタックは明日十三日だけということになった。B・Cにいる鳥居氏と若山は今日中にC・Iに登ってこなければならぬ。時間的にも体力的にも危険ということ、断念せざるを得なかった。中国側だけが第三次アタックを十三日に行い、われわれの登山は終わった。

## 雪宝頂登頂

中央大学四年 松本信太郎

雪宝頂の頂を初めて肉眼で捕らえたときの中で葛藤が生じた。「登れるのか?」「わからない」。山岳部に入学して以来、岩壁を目の前にしたとき、冬の糸線車中から目指す山が見えたとき、猛烈な敷きぎを強いられたときなど、さまざまな場面で感じてきたあの気持ちと同じだ。そんな時、いつも自分にこう言い聞かせた。「大丈夫だ。登ってこれる」。今回もまた、こんなことを口の中で唱えつつ、登山活動に入った。上納米という集落でキャラバンの準備をし、B・Cに向けて出発した。天気もいいし、上機嫌でちよつとした川を涉っていたら、あろうことが仰向けに転び、両国隊員の大爆笑を誘い、全身ずぶぬれ。会津の沢にでもいるような気分だ。

気を取り直して登っていくと、まともな避難。子供が馬の後ろにくっついて歩いている。遠くからはのどかな光景だが、脇で見れば両者とも必死なのがわかる。馬は六〇キロの荷を背負いつつ鼻息荒く斜面を登り、子供はサボる馬に対して拳大の石をリトルリーグ顔負けで思い切り投げる。石は馬の尻、首に容赦なく当た

り、あろうことか私にまで命中した。泣きつ面に蜂そのままキャラバンを終え、四二〇〇メートルのB・Cに到着したのだった。

両国合わせて四十人近くの人間が生活するのだからとトイレ作りにかかったが、頭の中は眼前に聳え立つ雪宝頂の登攀にめまぐるしく回転している。ここから眺めると、過去の遠征隊の報告書を読んで感じたとおり、C・I(五一〇〇メートル)への登り方がポイントになりそうだ。可能性が高いルートを選択するのはもちろんだが、より私たちの実力をぶつけられるルートを登りたい、と河原の石を動かしながら考えていた。

翌日、中国、日本双方からの構成で、C・Iへの荷揚げを開始した。中国側にはT・Vクルームが含まれており、われわれも気が引き締まる。

ルートはモレーンを巻いて急な斜面に取りついたが、足元が不安定な上、崩壊が激しく次々と落石が降ってくる。加えて慣れない高所での行動で苦しんだが、中国側と協力しつつB・Cへ帰幕した。思えばこれが初めての外国人との共同登山であり、それぞれ得るところは大きかったように思う。

順調に前進し、九月十一日、一次隊日本側四名、ついで十二日、日本側二名が頂でJ・A・Cの旗を掲げるこ

とに成功した。私が登頂したときはあいにく天気が悪く、周りの山々を望むことはできなかったが、きつとたくさんの山が屹立していたはずだ。われわれは今回、登頂に成功した。目標を達成した今、それを貴重な経験として、今後に生かしていかなければならない。四川省、チベット、ネパール、パキスタン、訪れるべき国はまだまだある。今回感じたような難しさ、たとえば高所での行動、体調の維持、外国人との意思疎通市場での買出しなどをスマートにこなし、再び高峰の頂上に立つことが日中両国関係者の方々、ならびにご支援くださった方々へのご恩返しになるのだから。

## 私の中国記

早稲田大学二年 渡辺佳苗

日本山岳学生会生部企画の日中学生友好登山隊に参加し、雪宝頂に登頂した。中国に行き、中国の学生とともに山に登ることができたのはとても幸せなことであった。私の登頂は、早大山岳部の監督をはじめ、支援してくださった多くの方々、また一緒に登った日本隊、中国隊のメンバーの大きな助力によるものであると思っっている。すばらしい機会をいただ

いたことに深く感謝したい。

今回の遠征では体調の管理と、高度順応がポイントになるだろうと予測していた。そのため、油をふんだんに使ったお腹にもたれそうな中国料理をほどほどに我慢し、北京、成都のホテルでは水を入れたコップをあちこちに置いたり、部屋の中に洗濯物を干して乾燥しないように努めるなど、気を配った。しかし、北京、成都では豪華なホテルに泊めていたとき、毎回豪華な食事をしてきたので、密かに当初の目的を忘れそうになった。それはともかく、手厚すぎるほどの待遇を受け、登山前の数日を過ごした。

成都で初めて中国側隊員と顔合わせとなる。どんな人たちとこれから行動をとるのか、期待と不安が入り混じった気持ちであった。食卓を囲みながら、めったにすることのない英語でのコミュニケーションは、思った以上にこぞった。筆談も交えながらどうにか会話を交わすのだが、お互いに意思疎通の難しさを実感することになる。

九月七日、いよいよ出発。一日中車に揺られ、移動する。道路は舗装から未舗装になり、思いきり揺られた一時間後、雪宝頂が頂を見せてくれた。そのときの気持ちを言葉にするのは少し難しい。憧れていたもの

に会ったような、初めて出会うのに懐かしいような。そんな感覚を抱いた山に登るのだ。わくわくするような気持ちで湧いてくるではないか。

BCからCI、そして頂上へ。ここまでできたならやるしかない、そんな思いでひたすら登った。ただそれだけだった。いや、多分いろんなことを考えてはいた。自分の中の戦いも確かにあった。しかしそういったことすべてが、一つの大きな目標のなかの一部であり、必死だった、と思う。そして頂上に着いたとき、まるで自分自身、そこへ行くことを知っていたかのような錯覚を覚えた。つまらないことだと笑われそうだが、そんな感覚が私は好きだ。大切にしたいと思う。

下山では時間が遅くなってしまい、

BCにいた中国隊の人たちが途中まで迎えにきてくれた。彼らに会ったとき、人間の温かさを感じた。BCの大テントに入るとき、その温かさに包まれたような気がして、うれしくて、何だかたまらない気持ちになつてしまった。山登りをはじめてよかつたなあ、とつくづく思う。

下山後は少し開放的な気分になつて、中国という国を見ることができた。はじめは苦労した中国学生とのコミュニケーションも、一緒に過ごす時間が少なくなるにつれて、次第に時間が惜しく感じられるようになった。またいつか中国に行き、中国の学生と再び山に登ることができれば、日本の山と一緒に楽しむことができたなら。そんな可能性をこれから大事に育てていきたいと思う。

## 行動概要 (1999年9月)

3日 (金)	東京—北京	李舒平氏出迎え
4日 (土)	北京滞在	天安門、故宮見学 中国マスコミの取材受ける
5日 (日)	成都へ	中国側学生と顔合わせ
6日 (月)	成都滞在	武侯祠見学
7日 (火)	成都—上納米 (車)	
8日 (水)	上納米—BC	
9日 (木)	ルート工作、高度順化	
10日 (金)	第一次アタック隊 (松本信、平井、岡本、渡辺) CIへ	
11日 (土)	第一次アタック、第二次アタック隊 (松本達、都築) CIへ	
12日 (日)	第二次アタック	
13日 (月)	中国隊第三次アタック	
14日 (火)	BC撤収	上納米へ
15日 (水)	上納米—松藩 (車)	
16日 (木)	松藩—九寨溝 (車)	
17日 (金)	九寨溝にて一日自由行動	
18日 (土)	九寨溝—成都 (車)	
19日 (日)	成都滞在	動物園へ
20日 (月)	成都—北京	
21日 (火)	北京滞在	北京大学見学 中国登山協会主催の祝賀会 曾曙生主席より雪宝頂登頂認定証を授与される
22日 (水)	北京—東京	帰国

海外の山

アレックス・ロウ、  
ジネット・ハリソン  
の雪崩遭難



1995年4月6日、エヴェレスト女性登頂者サミットのお別れパーティーでのジネット・ハリソン(中央)

写真・文 江本嘉伸

ヤパンマ(八〇一二メートル)で撮影チームのカメラマン、デーブ・ブリッグとともに雪崩に巻き込まれ、死亡した。

登頂後、山頂からのスキー滑降をめざす「シシャパンマ・スキー登山隊」のメンバーとして参加していたもので、五月のジョージ・マロリー発見の際に活躍したコンラッド・アンカーも巻き込まれたが、無事脱出した。

ヨセミテの岩場をテニス・シユーズで登ることから始まったアレックス・ロウの登攀人生は、地球のあらゆる山々を舞台にしていた。

ネパールのコンデリ西峰北壁の新ルート、クスム・カングルー北壁の新ルート単独登攀など、六千メートル級の困難なルートに次々に挑戦し、成功しているが、とりわけ昨年八月カラコルムの難壁、グレート・トラング・タワー北西壁を二人のメンバーと四週間がかりで登りきった時は、あらためてその実力を世界に見せつけた。エヴェレストにも二度登頂。しかし、八千メートル峰コレクターとは一線を画した。

ペルーのタウリラフ(五八三〇メートル) 南西バットレスをジェフ・ロウとともに登り、南極ではクイーン・モード・ランドのスコット峰南

壁の初登攀をやり、キルギスタンのアク・スウ山脈ではリン・ヒルとともにピーク四八一〇メートル峰西壁を初登攀、ロシアのハン・テングリでは標高差三〇〇〇メートルのルートを十時間で登下降している。

ヒドン・ピークの七三〇〇メートル地点から滑降しているようにスキーの技術も高く、今回は三人の撮影チームをまじえ、八千メートルの滑降がテーマだった。

まだ四十歳。稀有なクライマーの残された妻と三人の子供のために、アレックス・ロウ基金がつけられた。

十月二十四日、ダウラギリではジネット・ハリソンがシエルパとともに雪崩で死亡した。英国女性二人目のエヴェレスト登頂者である医師のハリソンは、その後マカルー、チョーオユー、そして昨年五月には世界第三の高峰、カンチエンジュンガに女性として初めて登っている。

九三年十月七日とともにエヴェレストの頂に立ったアメリカのゲアリー・プフィスターラーと意気投合し、彼のいるマサチューセッツに移住、昨年市民権を得た。

「ジネット・ハリソンの八〇〇〇メートル計画」として、九八年八月号のこのコラムで取り上げたので、記憶の方もあろう。

「女性初の八千メートル十四座登頂」を意識するようになったのは、エヴェレストに次いでカンチエンジュンガ、マカルー、チョーオユーと、世界第一、第三、第五、第六の高峰のてっぺんに立った、という自信、そして知ってしまった八千メートルの頂の抗し難い吸引力によるものだ。同じ八千メートル峰でも八千メートルそこそこの高さで、八千四百メートル以上では違う。一メートル五七センチと小柄ながらばねのような強靱な身体を持つ、四十一歳のハリソンにとって、K2を除けば、残るジャイアントたちは十分攻略可能な対象だった、と思われる。

九五年六月、「エヴェレスト女性サミット一九九五」に出席のため来日したハリソンに会って話を聞いたことがあるが、男性社会の中で多かれ少なかれ戦いを強いられてきたアジアの女性登山家たちと対照的に「山で女性だからという差別を感じたことはない」と明快に言い切ったのが印象に残っている。お国柄に加えて、医師としての誇りと、高所での強さの実感が言わせた言葉である。

さらなる高みをめざした者たち、雪崩の一撃が世界最強の登り手も、女性ドクターの夢も消し去った。

# 吉田喜義氏が製作したミニテントから 高所テントの歴史をたどる

村井 葵

①1929年製作の方錐型テント  
(キャンプ用夏テント)



②1929年製作の慶應義塾大学山岳部の吊りテント(通称馬小屋)



## ■古色蒼然、栄光の一張り

大町山岳博物館にマナスル初登頂の時の高所テントが展示されていた。双糸綿ブロードクロスの金茶、二人用、一九五四年製作の一張りであった。展示されていたテントは染色も褪せ、繊維ももろくなっていたが、見る者に当時の感動を呼び起こさずにはおかなかった。博物館では常設展示に耐えられないと判断し、今は収蔵庫に眠っている。

一九五六年の登頂時に使われたテントは、実はこのテントではない。記録映画「マナスルに立つ」や報告書でも明らかのように、ナイロン傘地の赤いテントが使われた。その登頂記の中で「最終キャンプには赤いテントが張られ、その中に赤い空気マットが膨らみ、赤い羽毛の入った寝袋が置かれた。装備はすべて赤一色で準備されていた。テントは必要最小限に設計されていて、窮屈なものであった」と報告されている。

この高所テント製作の立役者は吉田喜義、現在八十九歳である。すで

に子息の康夫夫婦に店を任せているが、今も東京・杉並区でミシンを踏み、その名人技は健在である。テント一筋の時の流れの中に身を置いていく。テントの話になると細い目が少年のように輝き、持ち前の早口が、ますます饒舌になる。根っからのテント職人なのだ。

## ■ナイロン部隊

### フランススのアンナプルナ初登頂

わが国登山用テントの第一号は、一九〇九(明治四十二年)、三枝威之介が当時京橋・船松町の片桐盛之助に作らせたものとされる。昭和五年創刊の「山」に片桐テントの広告が載っている。その後、戦後になって大塚博美(現日本山岳会会長)の指導もあって細野テントが製造に携わった時期もあった。片桐、吉田、細野はテント製作の老舗であった。その中でも、一九五〇年代から八〇年代にかけて、多くの海外登山、極地探検のテントを手がけた吉田喜義は極地テント製作のバイオニアといっている。

新しい素材の開発が、登山の進歩に大きく貢献した画期的な時期があった。一九五〇年、人類初の八千メートル峰アンナプルナがフランス隊によって陥されたことだ。巨峰の初登頂もさることながら、この

隊は「ナイロン部隊」と異名をとるほど、化学が生み出した合成繊維を多用していた。テント、ザイル、衣類にナイロンを採用し、その威力を世界に示したのである。ナイロンは高所環境で軽い、凍らない、強い、染色性がよい、という特長を遺憾なく発揮した。これはまさに道具の革命といえた。

私の学生のころ(一九六〇年代)は、生産間もない合成繊維は高嶺の花であった。まだ綿バーバリの冬用テントが使われていた。暖房を止めた夜は湿気を含んだ布地がたちまち凍りついた。撤収のときは氷漬けのテントがたためず、キスリングに収納できないので、背負子に縛りつけて下山したこともあった。麻ザイルも、綿のアノラックも凍ったものだ。ちょうどマナスル登山のころが、テントがナイロンに変わる過渡期であった。

## ■主流はドームテント

今、高所テントも進化を遂げて、自立型のドームテントが主流になっている。設営が簡単だし、撤収も楽で居住性も申し分ない。強風も柳に風と受け止める。幕体もゴアテックスが開発されて、湿気を外に出し水滴を通さないのが、快適な居住空間を確保できるようになった。ドーム

⑤第3次マナスル登山隊使用のカマボコ型テント



③1937年製作のドーム型冬テント(冬山用として広く使用された)



④1956年の登頂用に使用したマナスル型高所テント(必要最小限に設計された窮屈なものだった)

テントは内側からフレームを張る自立型なので、ベグ(杭)ワークがおろそかになりがちである。ポイントがテントの四隅をしつかりと雪面に固定すること、無人になったとき、強風におおられて飛んでいかないように知恵を絞ることだろう。ヒマラヤの高所の雪稜で、一日の行動を終えて帰幕したらテントが飛ばされて跡形もなかった、という報告を二、三聞くのである。

ドームテントがいつ頃から高所で使われるようになったのか、JACの報告書を繰って調べてみた。

七〇年エベレストではまだミード型が使われている。ただ南壁軍艦岩下の第三キャンプ(七〇〇〇メートル)ではジュラルミンの組み立てテント台と半かまぼこアウトポールの二人用特殊テントが考案されている。東海支部のマカルー隊もウィンパー型外ポール傘地テントを使っている。

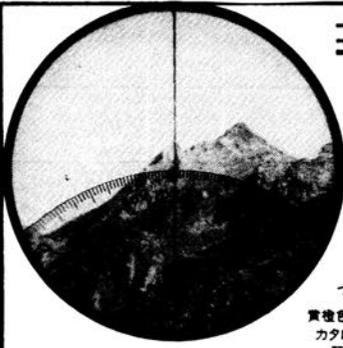
七三年信濃支部のアンナプルナもミード型、同年の京大ヤルン・カンもウィンパー型テント、七五年女子登攀クラブのエベレストもミード型テント、七六年のナンダ・デヴィ縦走隊にはじめてドームテントが使われている。このときはドームテントとウィンパー型テントの併用で、東峰と主峰の頂稜の縦走では、七二五〇メートルの吊り尾根の雪稜にウイ

ンパー型テントが張られている。同年の山学同志会のジャヌーもドームテントとウィンパー型テントの併用で、アタックキャンプはウィンパー型テントだった。

七五年ごろがドームテントが台頭し始めた転換期と見ることができそう。これはゴアテックス・ファブリックスの登場とともに、高所テントの第二の革命期といっている。だが、七五年、ラインホルト・メスナーのガツシャーブルムIでのビバーク・テントはまだウィンパー型が使われていた。靴もプラスチックではなく皮製だった。七八年エベレストの無酸素登頂時にはアウトポールのドームテントになっている。

ドームテントはさらに改良が加えられ、フレームも超々ジュラルミン、FRP、カーボンファイバーが取り入れられて強くなつていった。建築理論を採用した外力に対して抜群の抵抗力のあるジオデシック構造のドームテントなども開発されている。

八〇年のチョモランマではダンロップ製のドームテントが登場し、八年の日・中・ネのチョモランマIIサガルマタ友好登山隊(交差縦走)ではダンロップ製ドームテントが高所で多用されるようになった。ダンロップ以外にも、スタードーム、エスパースなどのドームテントも高所



**コンパスグラス HB-3**

広視界10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまますべて正しい磁気方位です。

重量78g.

つや消し黒	¥17,000	送料 ¥ 600
黄褐色メタリック	¥18,000	消費税別

カタログ代無料、電話、FAX、葉書でどうぞ  
〒117 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号  
TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

株式会社 石神井計器製作所

■ミニチュアテントの展示

春先、吉田喜義から相談があった。一九二九年から製作をはじめた主要

で使われている。

その後の登山隊はおおむねドームテントを使うようになる。さらに今では高所だけでなく、涸沢や剣沢のテント場でもドームテントの花盛りという様相を呈している。

その中でも究極の高所登山を指すソロクライマーの戸高雅史がわずか一キロ弱のウィンパー型のハーフツェルトを独自に開発し、使用しているのは特筆しておかなければならないことだろう。

⑧1979年に植村直己が北極点踏破に使用した方錐型三重張りテント



⑥1957年の文部省南極観測隊が使用したミード型テント



⑦戦後広く使用されたウィンパー型テント 1957年製作



ライフシェルターの試作1号 お元氣な吉田喜義氏 (89歳)

な山岳テントのミニチュアを作ったので、日本山岳会の総会で披露してほしいという申し出があった。わが国登山史の側面をテントを通して見るのも興味深いと思われた。

最も古い方錐型テントからは始まり、慶応義塾大学山岳部の吊りテント(通称馬小屋)、一九三七年のドーム型冬用テント、文部省南極観測隊のミード型テント、植村直己北極踏破の方錐型三重テント、マナスル型外ポール高所テントなどが、ところ狭しと並んでいた。一九三六年、わが国初のヒマラヤ登山、立教大学のナンダコート遠征のカマボコ型テントに興味があったが、これはヨシダテントの作品ではなく、好日山荘

の海野治良がかかわったらしい。せつかくの申し出だったが、総会が行われる九段会館は展示場所を確保できないので、十二月の年次晩餐会に展示しようということて了解してもらった。老職人は意気軒昂である。話は高所テントから、現在懸念されている中高年登山者の遭難防止問題に発展していった。

■これからの登山界の課題  
ライフシェルターへの思い

立山や浅間山、羊蹄山で起こった悲惨な遭難事故は、今後英知を絞って防がなければいけない。緊急避難用テントという観点から、何か優れたアイデアはないものかという話であった。

冷たい風雨や吹雪にさらされると、体温は見る見る奪われて、二〇度付近に下がれば凍死してしまう。冬山や極地登山の体験から、薄いナイロン地一枚が過酷な外気を遮断し、命を護ってくれることが分かっている。

若いころ、自作テントの試験で、富士山頂で雪中露営をしたことのある吉田喜義の構想を、要約すると、

昔から非常用の簡易テントとしてツェルトザックがあった。中高年の登山者が携行しやすいように、そのツェルトを発展させたライフシェルターをぜひ考えてみたい。年配者

必携の個人装備とするならば、重量と嵩が問題になる。少なくとも雨具より軽く、小さいものにまとめたい。入り口をファスナーで開閉するようにし、底つきの三角型テントを基本に、二人が寝泊りできるスペースにする。底つきにしておけば、風で飛ばされる心配はないし、温まった空気も逃がさないですむ。支柱は今流行の手持ちの杖やトレッキングポールを応用できるように考える。通気孔のベンチレーターは必要だろう。色は入り口のウォールと屋根をイエローとブルーのツートンカラーの入れ子にしたらいいかもれない。重さはたぶん、四五〇グラム以内で収まるはずだ。手におえない非常時には、体に巻いてうすぐまらだけで風雨から身を護れるはずだ。中高年登山者の遭難事故が社会問題になっている昨今、また人命尊重という観点から、日本山岳会としても、ぜひ啓蒙に尽力してほしい——ということであった。

名人、吉田喜義の息のかかったライフシェルターは、現在、試作完成待ちの段階である。(文中敬称略)

\*  
十二月四日の平成十一年度年次晩餐会の会場に「登山史を彩る山岳テントミニチュア」の展示コーナーを設けます。ぜひご覧ください。

# 報告

REPORT  
11月

自然保護委員会

## 自然保護全国集会 宮城県栗駒高原で開催

平成十一年度の自然保護全国集会は、九月十八日(土)、十九日(日)に、宮



恒例の全国集会は各地の会員84名が参加して開かれた

日本山岳会の各委員会  
同好会の活動報告です。

城支部との共済で宮城県栗駒町「いこいの村栗駒」で開催された。参加者は、JAC本部、首都圏および北海道、青森、秋田、岩手、宮城、山形、越後、信濃、山梨、富山、岐阜、福井、京都、関西、山陰、福岡の各支部、計八十四名。メインテーマ「日本山岳会の自然保護活動のあり方」をめぐる、活発な議論が交わされた。

十八日午後一時半、篠崎自然保護委員の司会で開会。大塚博美会長、柴崎徹宮城支部長から挨拶があった。大塚会長は「日本山岳会の自然保護のあり方は古くて新しい問題。支部の問題を、大体この辺だろうという土俵の中で、中央にあげて意思の疎通を図り、すばやい対応を図ることが大事ではないか」と述べた。

ついで、柴崎支部長(宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団研究室長・農学博士)から「栗駒山の自然とその

保全」と題して講演があった。支部長は専門家の立場から「栗駒にはそこにしかない大事な自然がある。それを私なりにいろいろな角度から考えて問題点をお話ししたい」として、スライドを交えてわかりやすく説明された。

### ■各支部活動状況報告

#### 一、鳥海山イヌワシ問題とその後

佐藤淳志(山形支部)

山形県八幡町とコクドによるスキー場開発計画に対する自然保護委員会の反対運動の経過について説明。とくにイヌワシ生息については、営巣地を発見、生息を確認。鳥海南麓スキー場計画は中止された。山形県が設定した「イヌワシ生息調査検討委員会」のメンバーにも委嘱され活躍した。

イヌワシ調査班は「鳥海山ワシタカ研究会」に引き継ぎ、継続調査することになった。環境庁は、鳥海山に「猛禽類保護センター」を建設することとし、本年着工した。

二、大山の現状・小西毅(山陰支部)  
①大山頂上の荒廃と復元(大山の頂上を保護する会)

大山の頂上付近は大勢の登山者による踏み荒らしで荒廃し、大きな問題になっている。「保護する会」ではその復元に努めているが、今年度

は、土嚢搬送、周回木道のロープ張り替え等の頂上作業、ヤマヤナギ植栽などを行った。

②全減危惧植物の調査と復元  
大山山麓の草原帯は草花の多いところであったが、自生地の環境の変化、乱獲などにより、減少してきている。

大山を中心とする西部地区の絶滅危惧植物を調査し、マツムシソウを復元モデル種に選定し、育成増殖を図っている。また、ユウスゲについても検討している。

#### ■日本山岳会自然保護活動のあり方(討議) ケーススタディ・早池峰

今回はとくに早池峰特別天然記念物とインターハイ競技問題をモデルとし、「日本山岳会の自然保護活動のあり方」について話し合われた。

まず大蔵委員長から早池峰問題について、これまでの経過を含めて説明があった(木の目草の芽第三七号参照)。続いて右手峠の湯浅俊行会員からスライドを使って高山植物の損傷状況が説明された。さらに菅原省司会員から「早池峰問題は本来支部あげて取り組むべきもの、なぜ本部が関わってきたのか、疑問に思われる向きもあろう」とし、支部内の事情について説明。また、八月十日の競技当日の状況についても説明が

あった。以下、いくつかの論点について述べる。

①認識のずれ 「特別天然記念物」として保護されている場所を山岳競技会場として選定したこと自体がおかしい。高山植物保護について認識に大きなずれがあるといわざるを得ない。一般会員自体についても自然保護についての理解は十分ではない。自然教育が必要。

②支部としての意思統一 地域の自然保護の事案については支部内の意思統一を図るべき。たてまえばその通りだが、現実には難しい。自然保護についての考え方は人により違う。また支部の責任者には対外的な立場があることが多い。

③決定したことの变更は難しい 早池峰のインターハイ競技のケースについても九五年に開催地が決まっております。簡単に変更できない事情があり、決まる前に情報をいち早く得て、すばやい対応が必要。自然保護関係の行政に対しても理解を求めることが大事。反対ばかりでは駄目。

④駆け込み寺 一部の支部員が支部内で解決できない事案を本部の自然保護委員会に持ち込むことをさすが、この事例は少なくない。このことのは非については論議はなかった。

⑤本支部の連携 もっとコミュニケーションを図る必要がある。そのた

めのネットワークが必要。

⑥全国支部自然保護委員会(仮称)の設立を提案 会員から全国各支部の自然保護委員会を結集した組織を作ることを提案があった。これについては本部委員会で検討する予定。

最後に、大蔵委員長から閉会の言葉が述べられ、四時間に及ぶ大会の幕を閉じた。

翌十九日は、栗駒山登山、世界谷地湿原での自然観察会を楽しんで解散した。(写真とも 伊藤 敏)

### データバンク研究会

### インターネットの利用方法が多様化

インターネットが普及し、各種分野で利用方法が多様化され始めています。近年とくに著しいのが、携帯電話でインターネット上への電子メールが送受信可能となり、さらにはインターネットのホームページ(iモード版)も見られるようになったことです。

このiモードではまだ試みられていないようですが、一般のホームページにはレーダーアメダスの気温、風向、風力、雲や雨量の状況が、一時間毎に地図上に細かく色分けで表示され、特定付近の状況が手に取る

### さんげんだより バスが止まった日



イラスト  
宇都木慎一

管理人

木村太郎・弥生

その日は明け方から激しい雨が降り続いており、上高地暮らし二年生の私たちにも「上高地線、止まるだろうな」とわかるほどの降りだった。有線で「夕方五時より通行止めになります」と伝えられたのが午後三時ごろ。その放送から一時間もたない九月十五日三時四十五分、釜トンネルが崩れたという話が飛び込んできた。信じられない気持ちで情報収集に走った。

バスターミナルは騒然とした雰囲気包まれており、上高地を下るはずだった観光客は呆然、ツアーコンダクターたちはバスターミナルを走り回っている。地元従業員たちは口々に土砂崩れのこと

を話しており、釜トンネルの上高地側出口付近のスノーシェードが崩壊したとのことだった。

この夜の上高地は、当初から宿泊を予定していた五百名に、足止めをくった観光客の八百名が各旅館に分かれて宿泊。翌日、上高地の警備隊の誘導で、全員が釜トンネルを歩いて下山していった。

観光バスやタクシーで上高地入りした人たちの中には、ハイヒールやサンダル履き、ミニスカートの姿もあり、テレビのインタビューストに対して「上高地は山だったんですね」と答えた人も……。

結局この土砂崩れから十二日間通行止めとなった。観光客のいない上高地は静かなもので、あの河童橋周辺にも人っ子一人いない。普段は観光客から餌一本当は禁止のはずの餌をもらって喜んでる鴨たちも心なしか元気がなく、失業者中といった感じである。それが本来あるべき姿なんだよ、と肩を落としたようにしている鴨たちに語りかけてしまった。

二十七日に時間制限つきで通行止め一部解除、さらに十月九日に全面解除となって、上高地はまたあのにぎやかさを取り戻した。

ように判るようになりました。一般の天気予報とは違い、現在の情報を取得し個人で判断できるようにしたのです。とくに台風接近時、集中豪雨、降雪時、雷雲接近時には、雲の状況と風向、風力が判るために利用価値は大きく、山で雨が何時ごろから降り出すか、または止むかまで判断できるようになりました。

これを留守宅でホームページを通じて情報を収集、携帯電話か電子メールで天候の状況変化を山へ連絡することにより、現地で適確な判断が可能となつていきます。もちろん携帯電話の電波が届くところでないといけないですが、電子メールを通じて知り合いが現在どの山のどの辺りを登っているかを確認することもできますし、一部の山小屋ではパソコンを設置しているところもあります。

日本山岳会のホームページには、そんなホームページ紹介のリンクコーナーもあります。その利用方法は、今後の登山形態に大きく影響してくるのではないのでしょうか。

(遠山元信)

### 山の自然学研究会

## 上高地自然解説の二十二日

日本山岳会の名のもとに、上高地

で行動した今年の夏の自然解説活動(インタープリテーション)の結果についてご報告します。

これは屋外・屋内での自然解説を通して、自然の価値と自然保護の大切さを伝えるもので、まずまずの成果であったと思います。

- 行動二十二日
  - 参加者三十一名
  - ガイドウォーク案内五十八回
  - 案内時間合計百六十時間
  - 案内人数合計五百十五名
  - ミニトーク六十三回
  - 聴衆合計千三百八十名
  - 望遠鏡案内二十一時間
  - 聴衆二千七百名
- という数字の結果となっております。特筆すべきは、今回はビクターセクターの全面的な協力を得ることができたことです。このお蔭で好きなだけ動くことができました。解説者としての参加者はJAC会員十六名、JACの企画している山の自然学講座の参加者十五名の構成です。初めての経験で戸惑った者もいたようですが、予想以上に楽しくこなせたと思っております。
- 期間は八月一日から二十二日、三十一名が順次出入りし、ほぼ一日に四人以上がいるように態勢を組み合わせました。
- 行事は、九時からと、またメンバ

ーとお客さまの様子によつては十時と十一時からのグループも出しました。解説者の力量にあわせてお客さま二十名を一人(時には助手つき)が受け持つて、小梨平や田代池、明神方面へ。案内の内容は人それぞれ知識と工夫の結果さまざまです。

また、河童橋のそばに晴れた日に望遠鏡を据えつけての自然保護解説をする者もいました。これを大道芸人?といひます。

屋内の行事ではミニトークと称する一時間弱の短い講演を毎日ビクターセクターで、午後に一、二回、夜に一回行いました。またこのミニト

ークは上高地温泉ホテルでも行いました。集まったお客さまの層と顔を見て、それに合うように話を工夫しながら進めることも少しうまくなりました。

これは予想以上に効率のよい行動となりました。ガイドウォークやミニトークを通して私たちが自身が多くの経験を積むことができたことを思い、この機会を提供してくださった方々に感謝しております。

上高地のパークボランティア全体の活動とうまくかみ合わせ、来年、再来年と量質ともに向上させていきたいと考えています。(大森弘一郎)

### ●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

## 中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円(税込)

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

### ●深田クラブ編●

深田久弥の研究

## 読み、歩き、書いた

飯島斉 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円(税込)

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社

東京都北区滝野川 7-6-13

電話・FAX 03(3915)8110

# 東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五、六枚をお願いします)



イラスト 野田四郎

## モンブラン情報 一九九九年夏 —天気と体力とガイド次第—

伊藤 敦

八月一日成田を発ち、二日エギュー・ド・ミディからタキユール、四日グーテ山稜からモンブランに登頂し、八日帰国したが、日本で知られていることと現地の実情との間に、若干の齟齬が生じているので、気のついた点を記してみたい。

ガイドを得るには二人ペアになる必要がある、単独の場合は登録だけして次の一人が現れるまで待たなければならぬという嘘。むしろ一対一のほうが安全だし、得やすい。

ガイドをつけないと入山できないという嘘。ただしコースを熟知しているか好天に恵まれない限り、ガイドなしで登ることはきわめて危険で

ある。

グーテ小屋は予約がないと泊まれないという嘘。私の宿泊した八月三日は満員であるにもかかわらず、予約なしの外国人数人と知り合った。しかし予約しておくほうが安全であることにはわりはない。

グーテ小屋で水やお湯をリッター百円程度で買えるという嘘。お湯、紅茶はリッター三十一フラン(約八百円)する。

その他「予備日のガイド拘束料」について、具体的実効性がどのようであるかは不明。調べる必要がある。また知っておかなくてはならないことで意外に知られていないこと——ガイド料にはガイドの旅費と食費、ミネラルウォーターなどの代金は含まれていない。したがってグーテコースの場合だと、レスーシユからニデーグルまでの往復旅費と、初日の

昼食(テートルース小屋)およびグーテ小屋での夕食、朝食、その他テールモスに入れる紅茶代などを当方で払わなくてはならない。概してガイド分は一万円とちよつとはあるが、フランスフランの持ち合わせがないと不都合である。が、ありがたいことにグーテ小屋ではVISAカードに限っては使用できた。

\*

今夏はヨーロッパ全域が好天に恵まれたが、私が滞在した八日間のうち、モンブラン山頂が望まれたのは八月二日の昼のみで、あとはボス山稜より上を一度も見せてはくれなかった。

世界で最も美しいピークのひとつとされるモンブランは、世界中のアルピニストたちの憧れの山であるが、いったん天候が悪化すると、ガイドは登頂せず引き返すという。私は二十六歳の次男と入山したが、天気には恵まれなかった。

八月三日のシャモニーは朝から小雨。幸いテートルースで雨は上がり、グランクローアールも残雪が少なく、落石もほとんどないに等しかった。

翌四日、グーテ小屋を出発するとき私たちのガイド、アントワーヌ・ヌーリー(Antoine Noury)は「ドーム・ド・グーテまで一時間半で登ることができれば、吹雪がくる

前に登頂できるだろう」と言った。一般にドームまで二時間とされているが、何とかついでにいたので、それから地獄の速歩が始まった。グランボスを抜けプティボスに到着したとき、横殴りの電気がきた。アントワーヌは、雷が怖いからもっと速く歩けという。頂上の気温はマイナス二八度、カメラの電池が作動しない。テールモスの紅茶も冷めている。

山頂は意外と扁平でスタンスが狭く、強風とあいまって真つ直ぐに立つていられない。下り始めると電気が吹雪に変わり、視界が七、八メートルとなった。アントワーヌは時折大声で怒鳴った。ゴー、ゴー!、ウエイクアップ! この日登頂できたのは私たちのほかは、前の四パーティと後の二パーティだけで、あとはすべてボス山稜の途中から引き返していた。

何とグーテ小屋から山頂まで三時間五十四分、帰りは一時間三十三分。小屋に帰着したとき、眼下のクローアールまでが雪に包まれていた。

年間で最も温度の高い八月第一週がある。そこで登頂成功のためのギアについて考えてみた。

ピッケルはウッドシャフトで長いものほどよく、厚手手袋の上は中綿の入ったオーバーグローブかミトン

がよい。毛糸帽子は耳まで隠れるもの、スキーマスクまたは目出帽。ザックにはテルモス一本は必需品。それ以外はまったく必要がなく、たとえば予備電池、予備セーター、非常食、食料、薬品なども小屋に置いていく(籠を借り受けて入れておく)。要するに行動装備さえ完璧なら、砂糖入り紅茶の入ったテルモスだけでよい。なぜならば天候悪化の場合、登るか脱出するかはガイドが決定するが、いずれにしても雪や雹、強風の中で着たり脱いだり食べたりできるわけがなく、多分ガイドはひたすら速歩を強要するだろう。数秒を争うからである。

以上は今回の私どもの体験による意見であるが、このあたりが日本とヨーロッパのアルピニズムの違いであろう。もちろん天気さえよかつたら、たっぷり荷物を持ち、ゆっくりと歩きながら存分に楽しめばよい。

グーテ小屋の食事はスープ、紅茶、サラダはまずまず。八月三日の夕食は湯がいたお米に角切り牛肉の煮つけだったが、富士山頂と同じ標高での沸点から無理からぬことはいえほとんどのどを通らなかつた。カップラーメンなど持参してお湯を買うという手も。

グーテ小屋のトイレは、小屋の南一段下がるところ、鉄階段で導かれ

る。五室の和式トイレがあり、ステンレスの凹型の板が、雄大なジオンネッセ氷河の上部に向かって四五度を保ち、物体が滑り落ちる仕組みになっている。堆積と氷結に備えて、突き落とすためのスキーストックが用意されている。

グーテ山稜はじめ雪原には無数の黄色い染みを散見するが、やはりトレパック(サニタリークリーンなど)の携行が求められる。

\*

次回は夏のマッターホルン北東稜を目指していますが、なにぶん六十歳なので可能かどうか、各種情報やご助言をいただければ幸いです。

## ウエストン祭今昔

### 早乙女緩次

上高地で開催のウエストン祭も二十世紀末で五十三回目を迎え、素朴な歴史ができあがった。

ウエストン祭の一回目開催は上高地ではなく、昭和二十二年六月十四日、松本市内の劇場であった。日本山岳会本部主催で、楨有恒、松方三郎、竹節作太三氏の講演からはじまった。私は講演会よりも日本初のヒマラヤ遠征の記録映画「ナンダコート登攀」に魅力を感じていた。その

とき私は中学二年生であつて、講演なんかどうでもよく、山の映画観たさに参加していたのである。筋の多い画面に、人の動きのリズムが今風ではなかつたのを強烈な印象として覚えていた。

二回目からは上高地入りしたが、バスの運行は中の湯止まりであつた。三回目のバスはかろうじて終点まで入つたらしいが、燃料は楢の木片から炭火(ともにストーブバスと呼んだ)に代わり、ガソリンへと三段階の乗り継ぎの時代であつたのだ。

四回目はいまだ会員ではなかつたが参加した。物資欠乏のはなはだし時代であつたが、天幕での私たちの食卓には鯨缶とイカ缶が置かれ、軍放出品の粉味噌入りの汁にはたっぷり野菜が入っていた。飯盒の米は農家育ちの仲間が持参してきてくれて、拾い集めたファイアー用の燃料とともに豊かであつた。酒の味を知らない高校時代だったので、梓川原では炎の燃え盛るのを見つめながら山の歌をのどを唄らして怒鳴っては青春を謳歌していた。今にして思えば、そのころの講師はウエストンと行動をともしたり、直接会つた人々だったが、いつの間にかそれらの人々の姿も消えていった。

五回目からの主催は、実質信濃支部に委譲されていた。私も六回目か

らは日本山岳会信濃支部員であつた。ウエストン祭の開催が直ちに支部発足の歴史でもあつたのだ。記念パッジは四回目から欠かさず、ポスターは五回目から(中止を含む)出された。手ぬぐいは六回目から出て、初期祭りの前後には、信濃支部応援の記念山行が催されていた。祭り前日の峠越えと、六月第一日曜日開催で定着したのは十五回目からである。

支部では近年になってウエストンが眠る墓地の地名から取つた「パトニーヴェイルからの風」というユニークな講演集を出版した。その中には、回数ごとに懐かしい記念手ぬぐいが印刷されていた。このアイディアは古い時代を彷彿させたが、残念なことに全部はそろっていないらしい。それに引きかえ、素材な木彫りの記念パッジは、保存されているのを山仲間が集めてくれたらしく、全部カラー写真で印刷されている。感心させられたし、うれしくもあつた。私も、欠落部分はあるが、数多くのパッジと同数の手ぬぐいを持っている。この楽しかつた祭りも、脳梗塞のため昭和時代の終焉とともに不参加になつてしまった。これまでに三十回は参加できたことの幸せを感じながら、テレビ、手紙、支部報、「山」などで知り、静かな山恋の日々を送っている。

## 図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

### 深田クラブ・編 深田久弥の研究

#### 「読み、歩き、書いた」

本書は深田クラブの創立二十五周年を記念して出版されたものである。深田クラブとは、本会元副会長深田久弥の全人格、すなわちその文学と登山、とくに名著「日本百名山」を敬愛し、その全山踏破を目標とする一種のカルチャークラブである。同クラブは先に「日本二百名山」を世に問うているが、本書はその第二弾ともいべきものである。

いま空前の「日本百名山」ブームを呼んでいるが、その根源ともいべき、深田久弥の研究は意外に等閑

視されがちである。「深田久弥を知らずして『日本百名山』を語るなかれ！」と警告を発している。

執筆者は深田久弥の研究に造詣の深い、同クラブの飯島、高澤、高辻の三氏、本会会員でもある。表題となった文字通り「読み、歩き、書いた」久弥の生涯を余すところなく健筆をふるっており読み応えがある。

本書は、数少ない深田久弥の研究の貴重な一冊であり、また今後の同氏の研究に大きな一石を投ずるものと高く評価したい。(小倉 厚)

一九九九年九月 新ハイキング社  
発行 三八七ページ 千六百元

### 中島寛・著

#### 「二期一会の山、人、本」

「亭主元気で留守がいい」とばかり正月、土、日は登山とマラソンに明け暮れていた著者が、癌におかされていることを知った。せめて自分の生きてきた道を家族のために残そうと、長年にわたって執筆したものをまとめ始めたが、奥様から友人に配布するように言われた。仲間の手に届くころには既にこの世に存在しない私がとやかく言う筋合いはないと「はじめに」で本人が記している。

一九六一年アンデスで初登攀をなし、エベレストを含む世界の山々に

挑み、また、古典から現代にいたる膨大な山岳関係書を熟読した。この本では著者の山に対する真摯な態度、豊かな感受性、そして、いち早く無酸素登山や日中合同登山の可能性など、登山界の行方について予言するという卓見を見ることができるといえる。

うらやましいような充実した登山生活とともに、実業界にあっても上場企業の社長に昇りつめた。公私とも不屈のバイタリティーを有し、駆け抜けた、まさに男の真髓が語られている。(南井英弘)

一九九九年四月 中島昭子発行  
四三八ページ

### 江本嘉伸・著

#### 「能海寛

#### チベットに消えた旅人」

これは帰ってこなかった求法の旅人、能海寛の物語である。

私たちは帰ってきた旅人の言葉で物事を理解する。しかし帰れなかった人は必ず伝えたかった言葉があるはず。そのことをできれば今にのみがえらきたい、そして明治のあの時代、なぜ何人も日本人がチベットに向かったのかを見極めたい。能海は三十四歳で消息を絶つたが、膨大な量の書き物が残っていた。最近(平成八年十一月)約百五十点の新

資料が生家の寺で発見されている。これら内外の資料をもとにまとめたノンフィクションである、と著者は述べている。

百年程前の一八九八年、チベットに向かった四人、成田(三十五歳、外務省)、能海(三十一歳)、寺本(二十七歳、東本願寺学僧)、河口(三十三歳、黄檗宗学僧)がいた。河口はネパール・ムスタンを経てラサ入り、他の二名は中国からラサに達したが、能海は雲南・大理から麗江に向かうと、一九〇一年四月十八日付便を最後に消息を絶つた。

彼らの生い立ち、時代的な背景、何をしていたのか、したかったのが資料を駆使して本文の大半を埋めており、日清戦争・義和団事変も絡み、明治後半の文明開化が香る読み物となっている。

巻末には参考文献、写真、年表、地図、人名索引が掲載されている。(三沢 三)

一九九九年六月 求龍堂発行  
三〇二ページ 二千円

### 白旗史朗・著

#### 「山岳写真撮影テクニック」

山岳写真の第一人者による執筆で、先の「山岳写真入門」および「山岳写真テクニック」の全面改訂版であ

る。山岳写真撮影のための入門編、基本編、応用編の三部で構成され、山岳写真の原則から機材、撮影技術、実践的アドバイスなどを詳しく解説している。

シャッター・チャンスをどのように求めるか、悪天候の後に変貌する山岳との対峙、四季折々の山岳の自然など、写真とともに解説する。とくに近年はカメラの自動化などにより、ハード面での著しい発達が見られる一方、真の山岳写真のあり方に取り組む人々の心構えが不足していることを厳しく指摘する。

春夏秋冬の山岳題材を全ページ上質紙カラー掲載し、より高度な写真技術までを説明した、山岳写真愛好家へのよき指導書である。

(林 栄二)  
一九九九年七月 山と溪谷社発行  
三一九ページ 二千八百円

向 一陽・著  
島の山探訪記  
「島のてっぺんから島を見る」

本書は「につぼん島の頂で」というタイトルで、雑誌「山と溪谷」に一九九六年春から約二年余連載された記事を大幅に加筆・補筆したものである。北は礼文島から南は父島、西の西表島まで、「島のてっぺんに

立つて見たせば、改めて土地の美しさがわかり、土地への愛着も生まれる」と思い立ち、全国二十七の島々とその山頂を著者自ら踏破した紀行文である。

昨日まで自然を享受し生活に満足していた人々は、過疎化や高齢化で追い詰められている。島の歴史や人々の生活とかけ離れた観光開発や河川の改修などの施策は自然破壊へと進む問題点が多いことを鋭く指摘。島を見つめながら自然保護の大切さを語りかけた冊子である。

島を訪れたいと思う人にとつて、どんな島かはもちろん、その島の抱える課題などを知るガイドブックとしても良書であろう。(林 栄二)  
一九九九年六月 山と溪谷社発行  
三六二ページ 千七百円

田口二郎・著  
「山の生涯」  
―来し方行く末(上)―

戦前の山好きには、都会育ちのエリート層出身者が多く、彼らの中には、若いころに西欧文化を体験しつつ雪線以上の山々を登るといふ経験者もいた。本書の故田口二郎会員(二五九〇番)は、その類の貴重な一人であったといえよう。

この本(「山の生涯」上下二巻、

全八章、七十六篇)は、著者の六十余年にわたる間にいろいろな本に投稿した文章を集めて命題別に整理、編集し、一本にしたものである。本人は生前に出版する考えでいたらしいが、諸般の事情で故人になってから世に出た。まことに残念である。

本書の内容を章名をもって概観すると、I 青春の山(8)、II スイス時代(11)、III 山の随想(14)、IV 山の本(8) II 以上が上巻、V マナスル(4)、VI 山の人たち(18)、VII 異国にて(8)、VIII 越し方行く末(4)となる。各文の執筆も二十代から八十代に及ぶといういささか珍しい本だ。

I 章の五篇は、旧制甲南高等学校時代に書いた山行の報告文で、同じころに関東の高校生であった私にはなかなか面白かった。II 章は著者にしか書けないと思われる分野で、とくにアイガーに関する文(アイガー北壁五十年)などは、私などはまったく知らないスイス・アルプス地域の文化的交流や軋轢が語られていて勉強になった。

III 章は著者の登山観を知ることができる文章が多い。私が評価したいのは「登山今昔」(二四四～二六二ページ、一九八一年稿)と題する論説で、ヒマラヤに出かける日本と西欧の登山隊の比較文化論がなかなか

面白い。東西の登山者、隊の登山流儀の文化論的課題は十分に酒席の肴になる。著者が生前世に贈った「東西登山史考」(岩波書店刊、一九九五年)の構想の原点を垣間見ることが出来る。

そして、一九九八年稿(「山岳」九三年)の「ラインホルト・メスナ」論は最近の極限的、単独登山という新しい登山様式に対する著者の評価が、いささか空想的に書かれていて、われわれ老骨にとつてはまことに楽しい一文と受け取れた。

(渡辺兵力)  
一九九九年九月 茗溪堂書店発行  
八千五百円

「一人では行けない、でも行きたい。」  
それにお応えするのが実体験に基づいた  
アルパインツアの旅づくりです。

**日本の航空会社で行く、ヒマラヤの山旅**

ノストップ・チャーター便でカマンスへ! <関西空港発着> 残席僅少

年内発着 ①12月20日(月)～12月28日(火) 9日間[全日空]

年末出発 ②12月27日(月)～1月4日(火) 9日間[JALウェイズ、全日空]

●フリータイム 158,000円/エヴェレスト展望 272,000円(12/20発)

運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員

**アルパインツアサービス株式会社**

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911  
大阪 ☎06(6444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

## 図書受入報告 (1999年9月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版社	出版年	寄贈/購入別
坪田和人	ブナの山旅 (ヤマケイ情報箱)	351pp/22cm	山と溪谷社	1999	出版社寄贈
戸野昭・朝倉宏(編)	山で唄う歌 I [新版]	126pp/16cm	茗溪堂	1999	編者寄贈
橋本勝	カムチャッキーの巨人:カムチャツカ半島の最高峰に行く (写真集)	119pp/29cm	橋本勝 (私家版)	1999	著者寄贈
沢野ひとし	やまの劇場	173pp/22cm	山と溪谷社	1999	出版社寄贈
九里徳泰	人力地球横断:中・南米編	301pp/22cm	山と溪谷社	1999	出版社寄贈
小西郁子	小西さんちの家族登山:妻が語る登山家・小西政継の素顔	349pp/20cm	山と溪谷社	1999	出版社寄贈
深野稔生	宮城産上の山に行く: Let me tell you about my mountains	223pp/22cm	無明舎出版	1999	出版社寄贈
白山書房編集部(編)	日本の溪谷 '98/'99	264pp/21cm	白山書房	1999	出版社寄贈
辻まこと	辻まことセレクション [1]:山と森 (平凡社ライブラリー No.301)	260pp/17cm	平凡社	1999	出版社寄贈
深田クラブ (編)	深田久弥の研究:読み、歩き、書いた	387pp/21cm	新ハイキング社	1999	編者寄贈
広渡敬雄	広渡敬雄句集:遠賀川	181pp/20cm	ふらんす堂	1999	著者寄贈
樋口一元 (編)	近畿山岳愛好会創立25周年記念 (平成11年)	227pp/26cm	近畿山岳愛好会本部	1999	発行者寄贈

## 台湾大地震で中華民国 山岳協会員15名が遭難

未曾有の被害をもたらした9月21日の台湾大地震では、友好関係にある中華民国登山協会会員15名が、登山中に不幸遭難死されました。合同葬儀にあたり、日本山岳会より弔意を表しました。

「行政院体育委員会

主任委員 趙麗雲 様

中華民国山岳協会会員の思いもよらぬ悲報に接し、大変驚いております。前途有望な隊員を一度に失われた皆様方のご胸中をお察し申し上げ、今はただ15名の方々のご冥福をお祈り申し上げますのみでございます。

さっそく参上して弔意を申し上げるべきところ、なにぶん遠隔の地でございます故、心ならずも書面にて失礼申し上げます。

1999年10月14日

日本山岳会会長 大塚博美]

なお、大地震で被災された山岳会会員が、いまだ復興の手の届かない

山域の住民救済、山地修復に汗を流しています。

現在同地曾遊の有志があいより、隣邦山友への鎮魂とあわせ、激励の意をこめて義援金を募っております。趣旨にご賛同の諸兄弟姉のご協力を切望いたします。

(代表世話人 藤平正夫)

募金額 1口5,000円

郵便振替口座 00190-0-158559

締切 12月15日

日本山岳会台湾地震募金

担当 木村俊博 TEL・03-3485-5378

# 会務報告

## 九月理事会

日時 九月八日 十八時三十分～二

十時五十分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、高原、村井(葵)、南川(高遠代理)、宮下、鰐坂、松原、増山、坂井、河西、山本、坂本各理事、神崎、中村各監事、平山、中川、吉永、平野各常任評議員

## 【審議事項】

一、許可願い三件

①朝日新聞社「週刊20世紀」一九〇五号(十二月二十三日発刊予定)へのウエストーン関係資料等の掲載について。(西村) 承認

②NHK(十月二十三日七分間放送予定)冠松次郎に関して九月末に取材したい。(鰐坂) 承認

③NHK長野放送局(九月十四日「二十世紀を振り返る」放送予定)ウエストーンに関するもの(以前収録したもの)の再放送。(坂本) 承認

## 【報告事項】

一、自然保護に関するアンケート実施報告(大蔵)

全国支部関係者六十八名に対し委員長名で実施したアンケートは、九月十八、十九日実施予定の自然保護全国集会での「自然保護活動のあり方」のケーススタディとして、今年早池峰山で実施された高校総体に関するものであった。本音が聞きたいこともあり、無記名の回答になって

いる。表現など反省する面もあったが、九月四日の評議員会での疑問に對しては説明し、了解を得た。

二、平成十一年度(第二回)秩父宮記念山岳賞について(竹内副会長)

八月三十一日、運営・審査委員会を開催した。

①本年度新規二件応募があった。前年度の四件(五件は辞退)とあわせて六件が審査対象。

②前年度の山に関する応募三件が辞退したことは残念。

③小田審査委員長より審査委員追加として木下是雄名誉会員の推薦

次回の審査委員会を九月十四日開催する予定。

三、平成十一年度海外登山基金について(坂井)

七月三十日、海外登山基金委員会を開催した。

①評価基準について、従来の採点方式は参考程度とし、委員会メンバーによる判断を重視。

②より多くの登山隊に申請を促すよう「会報」以外

に山岳雑誌にも応募広告を出す。③

助成金額の増額を次年度は行いたい。④助成金を受けた隊には晩餐会などで報告してもらおう。

以上に対し、増額は基金を取り崩さない計画であり、隊助成最低額を決める。記録を「山岳」に記載すべきではないかとの意見が出された。

四、承認の報告(西村)

①都岳連第七回日本山岳耐久レースへの名義後援。

②郷土出版社「ウォルター・ウエストーン未刊著作集」

(十一月発刊予定)への「山岳」第

八三年の記事掲載を。

③マガジントップ社「私の創る旅シリーズ」

④名作の舞台を旅する」(十月発刊予定)

へのウエストンの肖像写真掲載。

五、日中登山交流二十周年記念行事

について(西村)

中国登山協会より標記につき打診

があった。十月実施は無理だが、来

年も視野に入れて実施内容などを今

後検討する。今回提案のトレッキング

は断念。以上を踏まえ、九月十一

日より訪中する神崎監事に打ち合

わせを依頼。なお、二十周年は一九

八〇年チョモランマ登山以降の二十

年間の活動交流を対象とする旨確認。

六、委員会報告

総務委員会・高原

●九月二十日(月)委員会、同好会連

絡会議開催。

●十一月六日(土)上期新入会員オリ

エンターション開催。

●会員名簿(一九九九年版)は十二月四日晚餐会に発行予定。スポンサー募集中(十月末まで)

●一九九九年、二〇〇〇年役員・委員会名簿を本日発行。

財務委員会・村井(龍)

●公益法人収支計算書を税務署提出。

●会費納入、出費等会計報告。

●七、八月入会者二十五名。

会報編集委員会・村井(葵)

目録(一九九九年八月二十日発行)

表題の年号に誤りがあり、訂正を。

「一九九六年(誤)一九九五年(正)」

山岳編集委員会・南川

●一九九九年(第九四年)目次につ

いて資料により報告。

●英文サマリーを増やす予定。

図書委員会・宮下

●十月二十九日(金)「第八回山を語

る」講師・高木泰夫会員

●十一月二十六日(金)「第三十一回

山岳図書を語る夕べ」講師・神

長幹雄会員

資料委員会・鰐坂

●十月三十日(土)より写真美術館に展

示(全国山岳博物館で展示の一環)

予定。

データバンク研究会・鰐坂

●Eメールアドレス変更。当分は新

旧両方使用可。

指導委員会・松原

## 関東一都六県の会員諸氏へ 編集協力をお願い

会報「山」9月号でご承知のように、「新・日本山岳志(仮称)」の刊行が予定されています。全国各支部の協力によるものですが、関東一都六県には支部がありません。前記会報報告でご承知のように、この地域の担当は首都圏地区ということになり、すでに7月から編集委員会をつくって、準備をはじめています。

そこで、関東一都六県在住または出身の会員で、この企画に参加・協力していただける方を探しています。具体的には、この本に取り上げる山の選択とそれらの山の原稿執筆です。詳細については個々にご説明いたしますので、関心のある方は下記編集委員会までご連絡ください。

関係会員の絶大なご協力をお願いいたします。

日本山岳会本部内「新・日本山岳志(仮称)」首都圏地区編集委員会(担当・大森久雄)

●十一月五〜七日 岩登り講習会  
(文部省登山研修所)  
●自然保護委員会・河西

●早池峰山岳競技実施後の現場状況を、河西、大蔵委員長他会員三名とNHKカメラマンで検証。結果は高山植物二百株損傷、岩をノミで足場用として百三十カ所削られていた。山は傷ついた印象だった。  
●学生部指導委員会・吉永  
●日中学生友好登山隊は九月三日出発。北京、成都での交流を現地新聞で報告。

●山研運営委員会・坂本

●利用状況を資料により報告(十月末で七百二十名予定)。

●九月二十五日オートタムコンサート。  
●閉所は十月三十日の予定。

●ミニ水力発電実行委員会・坂本

●七月上旬着工予定だったが、新たに河川法のクリアが必要となり、手続きで手間取った。九月中旬着工許可が下りる目途がたち、十月末には完成予定。

七、その他

①平成十一年度第一回評議員会を九月四日十三時より当会議室で開催。会務報告、名誉会員推薦、百周年記念事業などについて、報告、意見交換を行った。(西村)

②全国支部懇談会(岐阜)に大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、森坂本、西村、高原各理事出席。

③九月十七日、長野県山岳総合センター三十周年記念行事を開催。山浦

信濃支部長が出席。(西村)

④立教大学ガッツシャープルムII峰登山報告。海外登山基金へのお礼が述べられた。登山は二度の雪崩に遭うなどで登頂にはいたらなかった。下山路は百年に一度の大雨に見舞われ困難を極めた。(鯉坂)

⑤吉田テントより一九二九年からのテントのミニチュア版の展示要請があった。晚餐会など展示の機会を検討する。(西村)

⑥恒例のビールパーティーを九月四日、主催山研委員会、協力二火会で開催。約五十名が参加。(高原)

### ■会員異動

物故

松尾 健(五一―三) 99・9・25  
退会

堀 光子(九八五六) 99・9・30

草部契之(二二六六九) 99・9・30

終身会員

竹島正義(四四四八)

安部頼二(四六八二)

## ルーム日誌

1日 学生部 データバンク研究会

2日 自然保護委員会 山の自然学研究会

3日 アルパインフォトクラブ

4日 評議員会

6日 総務委員会 データバンク研究会 アルパインスキークラブ

7日 常務理事会 アルパインスケッチクラブ 山げらの会

8日 理事会 93同期会 会報編集委員会

9日 遭難対策委員会 アルパインスキークラブ

11日 名誉会員を囲む会

13日 自然保護委員会 アルパインスキークラブ

14日 財務委員会 自然保護委員会

16日 秩父宮記念山岳賞事務局会議

アルパインスケッチクラブ

95同期会

16日 科学委員会 山研運営委員会

「新日本山岳志」会議

17日 三水会 フォトビデオクラブ

20日 総務委員会 学生部

21日 百年史委員会 集会委員会

アルパインスキークラブ

22日 学生部 フォトビデオクラブ

27日 アルパイン実行委員会 秩父宮記念山岳賞審査委員会

28日 自然保護委員会 高所委員会

ファイルムビデオ委員会

29日 集会委員会 学生部 総務委員会

30日 ミニ水力発電実行委員会 学生部 98同期会

9月来室者710名

# INFORMATION



イラスト・村上直温

## ◆往年の名作がよみがえる―鑑賞会

フィルムビデオ委員会

かつて山好きの若者たちを魅了した本格的な山岳映画。アルプスに挑んだ名クライマー、ガストン・レビュファの登攀シーンをたっぷり。

日時 平成十二年一月二十五日(火) 十九時より

会場 日本山岳会ルーム

プログラム 解説/羽田栄治

●「天と地の間に」(字幕入り)

●「カナディアンロックキー・ヘリ―スキー」

## 第二回秩父宮記念山岳賞 選考結果について

秩父宮記念山岳賞運営委員会

第二回(平成十一年)山岳賞の受賞業績として該当するものがなく、残念ながら表彰は見送られることとなりました(詳細は次号に掲載予定)。

●会費 五百円(茶菓代)

## ◆第七回「心に映る山々」写真展

フォトビデオクラブ

山の写真に魅せられた仲間たちの写真五十四点を展示します。一同がんばっています。ぜひご覧ください。

期日 十一月二十日(土)～二十九日(月)

十日～十八時(最終日十六時)

会場 東京・西新宿「三省堂文化会館」

館エントランス・ホール」

(新宿中央公園西側通り)

TEL・〇三―三三三―二六一―

## ◆第二回山行「景信山」

98同期会

二〇〇〇年の餅つき大会です。

日時 平成十二年一月二十三日(日)

雨天決行

集合 JR中央線高尾駅北口改札口

九時

行程 高尾―小仏登山口―景信山―

明王峠―相模湖(解散)四時間

会費 二千五百円(昼食代)

交通費各自

持物 コップ、食器、箸、飲物(アルコール少々可)

申込 十二月二十五日までに会員番号を記入の上ハガキで海老沼

清(〒二三三―一〇〇二)川口

市西川口一―二七―一四)宛

TEL&FAX・〇四八―二五五―〇一六六

\*98同期会例会をルームで(八時～

二十時)行います。途中からでも

ご参加ください(十一月二十五日、

十二月十六日、一月二十日)

## ◆「山の自然学講座」を開催

山の自然保護の指導者、活動者養成のための講座です。

●第三百十回 十二月十一日

約十名が上高地でのミニトークを披露

●第三百三十一回 一月二十二日

●第三百三十二回 二月十一～十三日

今井夫妻のフィールド白馬山麓で

冬の自然観察プログラムを体験

●第三百三十三回 二月二十六日

会場 環境パートナーシップオフィス

ス会議室(十時～十七時)

世話人責任者・大森弘一郎

●松田敏男 山の版画展

南アルプスを中心に漆を使ったシルクスクリーン作品約二十点を展示

期日 十一月三十日(火)～十二月十二

日(日) 十二時～二十時(十二月六日休廊)

会場 平安画廊(京都市中京区寺町

通三条上ル TEL・〇七五―二

三―〇六九四)

◆ストレッティング講座 山げらの会

「楽に山に登りましょう。筋肉痛よ

さようなら」をテーマにストレッ

チングと道具を使わない筋肉トレ

ニングを毎月一回行っています。ご

参加ください。

十二月六日(月)・一月十二日(水)

十八時三十分～二十時

場所 山岳会ルーム

申込 三井(TEL&FAX・〇三―三四五

一―五三八八)

\*軽装、敷物をご用意ください。

◆総務委員会&事務局のホームページ・Eメールアドレスをお知らせします。ご利用ください。

URL: <http://www.jac.or.jp/>  
e-mail: [jac-sounmu@jac.or.jp](mailto:jac-sounmu@jac.or.jp)

## ◆編集後記◆

●学生諸君の雪宝頂登頂に思う。彼らにはいい体験ができた。山を、大自然を、地球を心底好きになってほしい。同時に大なる好奇心を育ててほしい。すべてはそこから始まる。ぜひ次のステップへ。

●毎月第二水曜日、午後三時よりJACC会議室で会報「山」の編集会議を行っています。開かれた会員のための「会報」を目指しています。ご意見をお持ちの方は、ぜひどうぞ。

## 日本山岳会会報 山 654号

1999年(平成11年)11月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03) 3261-4433

FAX 東京 (03) 3261-4441

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社